TADOKU JUNIOR　はじめての名作童話　★★★☆☆ ふつう　880語

Star Jewels

星の宝石（星の銀貨）

Katharine Pyle（1918年の本）　原文そのまま　朗読：Lydia

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　まずしい女の子が、寒い冬の森で出会った人たちに、パンも服もかたかけもあげてしまいます。すると、夜空からふしぎなことが……。

A little girl once lived all alone with her old grandmother upon the borders of a forest. They were so poor that they were scarcely able to buy food for their mouths, or clothes to cover them.

“Never mind, Granny,” the little girl would say. “Some day I will be big enough to work, and then I will earn so much that I will be able to buy everything that we need, and to give something to other poor folk as well.”

One day the child went off into the forest to gather fagots. These she hoped to sell for a few pennies in the town over beyond the hill. She was to be gone all day, so she took with her into the forest a bit of the black bread, which was all they had left to eat.

It was winter, and the air was bitterly cold. The child wrapped her little shawl about her, and ran on as fast as she could. She was hungry, but she intended to save her crust until after the fagots were gathered.

Just as she reached the edge of the forest she met a boy, even smaller than she herself, and he was crying bitterly.

The little girl had a tender heart. She stopped and asked the child why he was weeping.

“I am weeping,” he answered, “because I am hungry.”

“Have you had nothing to eat to-day?” she asked.

“I have had nothing, and I am like to starve, for I know not where to go for food.”

The little girl sighed. “You are, perhaps, hungrier than I,” she said, and she took the crust from her pocket and gave it to the boy. Then she again hurried on.

A little farther on, she met another child who was even more miserable-looking than the first, for this child seemed almost frozen with cold. Her clothing hung about her in rags, and her skin looked blue through the rents.

“Ah,” cried she, “if I had but a warm little dress like yours! Help me, I pray of you, or I will certainly die of cold.”

The good little girl was filled with pity. “It is not right,” thought she, “that I should have both a dress and a shawl. I will give one of them to this poor child.”

She took off her dress and gave it to the child, and then wrapped the shawl closely about her shoulders. In spite of the shawl she felt very cold. Still she was near the place where the fagots were to be found, and as soon as she had gathered them she would run home again.

She hastened on, but when she reached the place where the fagots were she saw an old woman already there, gathering up the fallen wood. The old woman was so bent and poor and miserable-looking that the little girl’s heart ached for her.

“Oh, oh!” groaned the old woman. “How my poor bones do ache. If I had but a shawl to wrap about my shoulders I would not suffer so.”

The child thought of her own grandmother, and of how she sometimes suffered, and she had pity on the old woman.

“Here,” said she, “take my shawl”; and slipping it from her shoulders she gave it to the old woman.

And now she stood there in the forest with her arms and shoulders bare, and with nothing on her but her little shift. The sharp wind blew about her, but she was not

cold. She had eaten nothing, but she was not hungry. She was fed and warmed by her own kindness.

She gathered her fagots and started home again. It was growing dusk, and the stars shown through the bare branches of the trees. Suddenly an old man stood beside her. “Give me of your fagots,” said he, “for my hearth is cold, and I am too old to gather wood for myself.”

The little girl sighed. If she gave him the fagots she would have to stop to gather more. Still she would not refuse him. “Take them,” she said, “in heaven’s name.”

No sooner had she said this than she saw it was not an old man who stood before her, but a shining angel.

“You have fed the hungry,” said the angel, “you have clothed the naked, and you have given help to those who asked it. You shall not go unrewarded. See!”

At once a light shone around the child, and it seemed to her that all the stars of heaven were falling through the bare branches of the trees, but these stars were diamonds and rubies and other precious stones. They lay thick upon the ground. “Gather them together,” said the angel, “for they are yours.”

Wondering, the child gathered them together—all that she could carry in the skirt of her little shift.

When she looked about her again the angel was gone, but the child hastened home with her treasure. It was enough to make her and her old grandmother rich. From then on they lacked for nothing. They were not only able to have all they wished for, but to give to many who were poor. So they were not only rich, but beloved by all who knew them.



和訳 星の宝石（星の銀貨）（Star Jewels）

むかし、小さな女の子が、年とったおばあさんと2人きりで、森のはずれにくらしていました。2人はとてもまずしくて、食べる物を買うのも、着る物を買うのもやっとでした。

「だいじょうぶよ、おばあちゃん」と女の子はいつも言っていました。「いつかわたしが大きくなってはたらけるようになったら、たくさんかせいで、ひつようなものをなんでも買えるようにするわ。ほかのまずしい人たちにも、何かあげられるくらいにね。」

ある日、女の子はたきぎを集めに森へ出かけました。たきぎを、丘のむこうの町で売って、少しでもお金にしたいと思ったのです。1日じゅう出かけることになるので、女の子は、家にのこっていたたった1つの食べ物の、黒パンのかけらを持って森へ行きました。

冬で、空気はこおるように冷たい日でした。女の子は小さなかたかけを体にまきつけて、いっしょうけんめい走っていきました。おなかはすいていましたが、パンのかけらは、たきぎを集めおわるまでとっておくつもりでした。

ちょうど森のはずれに着いたとき、女の子は自分よりもっと小さな男の子に出会いました。男の子はひどく泣いていました。

女の子は心のやさしい子でした。女の子は立ち止まって、どうして泣いているのとたずねました。

「泣いているのはね」と男の子は答えました。「おなかがすいているからなんだ。」

「きょうは何も食べていないの？」と女の子はたずねました。

「何も食べていないし、もうおなかがすいてたおれそうなんだ。どこへ行けば食べ物があるのかもわからないし。」

女の子はため息をつきました。「あなたのほうが、わたしよりおなかがすいているかもしれないわね」と言って、女の子はポケットからパンのかけらをとり出し、男の子にあげました。それから、また先をいそぎました。

少し行くと、また別の子どもに出会いました。その子は1人目の子よりもっとかわいそうなようすで、寒さでこおえそうになっていました。服はぼろぼろで、やぶれ目から見える肌は青くなっていました。

「ああ」とその子はさけびました。「あなたのようなあたたかい服があったらなあ！どうか助けてください。でないと、きっと寒さで死んでしまいます。」

やさしい女の子は、かわいそうでたまらなくなりました。「わたしだけ服とかたかけの両方を持っているなんて、よくないわ」と女の子は思いました。「どちらか1つを、この子にあげましょう。」

女の子は服をぬいでその子にあげ、かたかけを、かたにしっかりまきつけました。かたかけがあっても、とても寒く感じました。それでも、たきぎのある場所はもうすぐそこです。集めたらすぐに走って家に帰ればいいのです。

女の子はいそぎましたが、たきぎのある場所に着くと、年とったおばあさんがもう来ていて、おちている木をひろい集めていました。そのおばあさんは、こしがまがって、まずしくて、とてもみじめなようすだったので、女の子は胸がいたくなりました。

「ああ、ああ！」とおばあさんはうめきました。「体のふしぶしがいたいこと。かたにまきつけるかたかけさえあれば、こんなにつらくはないのにねえ。」

女の子は自分のおばあさんのことや、おばあさんがときどきつらそうにしていることを思い出して、このおばあさんがかわいそうになりました。

「どうぞ」と女の子は言いました。「わたしのかたかけを使ってください。」そしてかたからするりとはずして、おばあさんにあげました。

こうして女の子は、うでもかたもむき出しにして、うすい下着1まいだけで、森の中に立っていました。冷たい風がまわりをふきぬけましたが、女の子は寒くありませんでした。何も食べていないのに、おなかもすいていませんでした。自分のやさしい心が、女の子のおなかをみたし、体をあたためてくれたのです。

女の子はたきぎを集めて、家にむかいました。あたりは暗くなりかけていて、葉のおちた木のえだのあいだから、星が光っていました。とつぜん、女の子のそばに、年とったおじいさんが立っていました。「そのたきぎを少しおくれ」とおじいさんは言いました。「うちのだんろは冷えきっているのに、わしは年をとって、自分でたきぎを集められないのだよ。」

女の子はため息をつきました。たきぎをあげてしまったら、また立ち止まって集めなおさなければなりません。それでも女の子は、ことわろうとはしませんでした。「どうぞ、持っていってください。神さまのお名前にかけて」と女の子は言いました。

そう言ったとたん、目の前に立っているのはおじいさんではなく、光りかがやく天使だとわかりました。

「あなたはおなかのすいた者に食べ物をあたえ」と天使は言いました。「着る物のない者に服をあたえ、助けをもとめる者を助けました。ごほうびがないはずはありません。ごらんなさい！」

たちまち女の子のまわりが明るく光り、空の星がのこらず、葉のおちた木のえだのあいだから、ふってくるように思えました。でもその星は、ダイヤモンドやルビーや、ほかの宝石だったのです。宝石は地面にどっさりつもりました。「ひろい集めなさい」と天使は言いました。「それはあなたのものです。」

女の子はふしぎに思いながら、宝石をひろい集めました。小さな下着のすそに入るだけ、持てるだけです。

もう一度あたりを見まわすと、天使はもういませんでした。女の子は宝物を持って、いそいで家に帰りました。それは、女の子と年とったおばあさんがお金持ちになるのに、じゅうぶんなほどでした。それからというもの、2人は何にもこまらなくなりました。ほしいものがなんでも手に入るばかりか、たくさんのまずしい人たちにも、分けてあげることができました。こうして2人はお金持ちになっただけでなく、2人を知っているみんなから愛されました。

たんご と クイズ 星の宝石（星の銀貨）

grandmother おばあさん	**forest** 森	**bread** パン
shawl かたかけ	**dress** 服・ドレス	**stars** 星
angel 天使	**diamonds** ダイヤモンド	

Q1 女の子がさいしょに出会った男の子にあげたものは？

① かたかけ　② 黒パンのかけら　③ たきぎ

Q2 かたかけをあげたのに、女の子が寒くなかったのはどうして？

① 火にあたっていたから　② あつい服を着ていたから　③ やさしい心があたためてくれたから

Q3 空からふってきた星は、本当は何だった？

① 宝石　② 雪　③ 金貨

こたえ

Q1 ② おなかがすいて泣いている男の子に、女の子は自分の食べるはずだった黒パンのかけらをあげました。

Q2 ③ 下着1まいになっても、女の子は寒くもおなかがすいてもいませんでした。やさしい心があたためてくれたのです。

Q3 ① ふってきた星は、ダイヤモンドやルビーなどの宝石でした。天使からのごほうびです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #49001（Katharine Pyle、1918年）。パブリックドメイン。
挿絵：Katharine Pyle（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Lydia（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。